

A-Lab Artist Talk

出 演 森末 由美子、加須屋 明子
司 会 都市魅力創造発信課長 松長
日 時 平成29年1月21日(日)／午後2時～午後3時
場 所 あまらぶアートラボ(A-Lab ロビー)



松長 森末由美子さんは京都で生まれて、京都市立芸術大学を卒業されて、日用品とかを使いつつ、おもしろい作品を作られている作家さんです。そして今回お呼びさせていただいたのは、同じく京都市立芸術大学教授の教授の加須屋明子さんです。加須屋さんは国立国際美術館で学芸員をされていたんですが、現在、京都市立芸術大学で教授をされています。龍野のアートプロジェクトの芸術監督や京都市立芸術大学のアーツ

ベース@ AKUA(アクア)の企画をされています。よろしくお願ひしたいと思います。

境界を変えて見方を変える

加須屋 明子さん(以下 加須屋) 主に今回で出品の作品について伺ったり質問したりしながら、みなさんもうどうぞ質問があったらその都度聞いていただけたらと思いますのでよろしくお願ひいたします。あと少し今回のだけじゃなくっ

てこれまでの作品についても画像をお持ちいただきましたので、それも含めながらどういうことをお考えになりながら、どういう風に作っておられるのか伺いたいと思います。まずは今ある作品とかのことから。今回すごく不思議なお三人、チャリングな作品が並んでいると思うんですけど、日常の中の身近なものの中から不思議な世界を発見していくとかドラマを見ていく作品で、それぞれ特徴ある空間にうまく展示しておられます。この作品は倉庫だった場所で、高低差があって小さな部屋に入っていく、求心的な場所でうまく空間使われていておもしろいと思います。

森末 由美子さん(以下 森末) そうですね。これはボディブラシの木の部分が造花の葉っぱになっているんですけど、以前もデッキブラシの毛の部分に草にした作品も作っていて、そういった関係でボディブラシの毛が伸びるというか、その端っこを越えて伸びていくようなイメージで。植物は方向性も出るし伸びていく感じなので。

加須屋 ボディブラシ、それからデッキブラシ、だいたいお家で使っているもので、だけどそこにその毛のかわりにあるはずのない造花。あの造花もどっかで見たことあるような草だったり造花だったり、その一個一個は知っていても、組み合わせたときにすごく不思議な感じがします。デッキブラシのほうは以前、京都のギャラリー・@KCUAでグループ展「転置」を企画したときに彼女にも参加していただいたんですが、そこに出品されていました…(画像を見ながら)これがそのデッキブラシに草が生えていた作品で。2011年。

森末 6年前くらいですね。

加須屋 ちょうど震災があって。

森末 そうですね。

加須屋 転置という言葉の意味が、いろんなものが揺らぐっていうのがすごくリアルに、日常生活が揺らぐとか。震災の前から企画していた展覧会

でしたが、震災後にはまた別の意味が重なりました。森末さんのおもしろいのはいろんな状況で日常生活の身近なものを扱って、それはすごく切実で真面目な態度なんですけど、でもすごくその中にユーモラスなところがあって。たぶんご本人は別にユーモアを表すことを狙ってはいないと思うんですけど、すごくこう見たときの驚きとかおかしみとかが伝わります。あ、これも2011年の作品です。レシートをビーズで再現した作品ですね。

森末 なんか、(話が)脱線してしまって…

加須屋 いえいえ。どちらにも共通しているのは、そういう身近なものを使いながら、でもその思いがけない組み合わせによって、不思議な驚きが生まれる。ちょっと今回の展示に戻りましょうか。倉庫を使って展示されようと思われたのは最初からそうだったんですか？

森末 今回は倉庫と和室に展示してるんですけども、いわゆるホワイトキューブっていう展示に適した、展示をする空間ではない場所だったので、その特性とか、例えばここはすごい細長いところで、こっちにすぐ上がっていくとか、縦長だったので縦長の作品がいいなと単純に思ったんですけど。それでその植物の進行方向とかのイメージがあるので植物使ったものにしたいなと思って。

加須屋 特にこのレース編み、やはりビックリしますね。どうやって作ってるんですかってみんな聞きたいと思うんで、ちょっと説明をしていただけますか。

森末 まず、テーブルクロスが置いてある。その上にグラスが置いてある。で、そのテーブルクロスの高さをちょっと移動させたいとかゆうことと、そのグラスは透明で向こうが透けて見えるんですけども、見ようによっては物がないように、というか透明なものを、まあ、ないとも言えるんじゃないかみたいな思いがあって。そういう物が物を突き抜けているような作品を作りたいなと思って

けども。作り方としては、レース編みは自分で全部編んでいってるんですけども、最初にガラスの内側の部分のレースを編んで、それで適したサイズになったら、ガラスに穴を開けて。

加須屋 穴を開けるんですね。よく割れないですね。

森末 割れたりもするんですけど、頑張って開けて。その穴にレースを通して、さらに外側を編んでいっています。

加須屋 仕組みはわかったと思いますが、技術的にすごく難しい、ああやって合わせるように編んでいったんですね。

森末 柄の編み方によって大きさが変わってくるので、ガラスにぴったりサイズにするのが難しい。一番難しいのは内側と外側のレースを繋がってるように見せたかったので、その、内側と外側のレース編みのテンションが変わってしまうのが難しいです。

加須屋 外と繋がってるように見えるけど・・・(笑)

森末 (笑)・・・そうですね。

加須屋 レースが確かにその、普通はレースのテブルクロスが置かれた上にガラスが置いてあるっていうのはよくある光景ですけど、それがこう持ち上がって中を突き抜けているっていうのが本当に不思議ですね。つい近くに寄って「どうなってるんだろう？」って見てしまう。この、レースのタイプの作品もよく最近はおられましたか？

森末 そうですね、ガラスの・・・(画像を見ながら)ガラスのほかにもこういう

加須屋 レースを使って、これは

森末 カス上げ。油を揚げる・・・結構デカインです

加須屋 これはどのくらい？

森末 このくらいです。(手でサイズを表す)

加須屋 これは同じですね。これはまあ穴が開いている、元々、ね。

森末 網なので。

加須屋 隙間のあるところにこう、通して。

森末 以前は茶漉しとかそういう網のものに刺繍をしていたんですけども、その延長というか。

加須屋 じゃあ刺繍があってそこからレース編みに展開していくような。

森末 そうです、そういうのもありますね。刺繍はその網の表面や内側だけだったんですけど、その面を通り抜けたと思って。

加須屋 最近のテーマは「通り抜ける」かなって、さっき話してましたけど。(画像を見ながら) そうですね、しばらくレースの

森末 カップアンドソーサー

加須屋 くっついてますね。

森末 ちょっと分かりにくいんですけど、これも中から

加須屋 カップとソーサーと両方共通り抜けてるんですね。

森末 そうですね。

加須屋 どのくらいかかりますか。レース編みを作るのは結構時間かかると思いますし、穴を開けていくのも根気がいる。

森末 レース編みの慣れにもよるんですけど、やっぱりサイズが大きいと時間がかかってしまいますね。

加須屋 大変な作業だろうなと思うんですけど、でも展示されてる出来上がったものを見るとそういう大変さを思わせないような、涼しい顔をしているというか、わりとクールに展示されているなって。その落差もおもしろいなど。(映像を見ながら) これは金魚鉢ですね。

森末 これも通ってますね。

加須屋 (映像を見ながら) 通ってますね。ザル。

森末 このへんはやっぱりさっき言ったように網とか透明のものとか、中途半端な面というか、面になりきれしていないような印象のものをを使って、

それを通り抜けさせたいという思いで作っています。

加須屋 面になりきれないということですね。

森末 そうですね。

加須屋 この前の刺繍の仕事だと、さっき言いかけた茶笥は今回出てますね。今回出てる先品の中で一番古いのはあれではないか、今回のチラシにも使ってるすごく印象的な、これは刺繍をさせてる、これもすごく細かいというか脆いというか・・・しっかりとしてるんですか？

森末 しっかりとしてます。

加須屋 そうですね。やっぱり、驚きますね。どうやってって、まあ図案を作って、

森末 そうですね、だいたいの図案を作って、あとはその色ごとの糸を交互に掛けていくっていうような感じですね。

加須屋 これは、さっきのざるの仕事に刺繍してたときに、もしかしてこの茶笥を。

森末 そうですね。そういう、(画像を見ながら)これは、ザル、付けまつげなんですけど、付けまつげとか、こういう、土いじりのやつ、飾い(ふるい)とか、こういう茶漉し。そういう網状のものに刺繍をするというか、その網状のもの面になりきれしていない面を、隙間を埋めて面を作っていくようなイメージはあります。これとか。

加須屋 こういふ表面の問題、森末さんが版画を大学では学ばれて、京芸の版画の修士課程を卒業されたときの確か修了制作の作品がすごく印象に残って、その後もいろいろ作品を見せていただいたんですけども、その時の問題意識として表面と、その境界の問題とかがすごく気になるとおっしゃっていたかと思います。

森末 そうですね。

加須屋 元々ある型に対して、自分が働きかけていく、そういう手法が、すごく版画、とは言いませんが「版」という考え方に近いなと思ってい

ました。(画像を見ながら) こちらは和室の展示ですね。

森末 楽譜の表面を、というか楽譜を削っている。

加須屋 ソナタは何か、思い入れはあったんですか？

森末 いや、たまたま。楽譜を使いたくて、文庫本とかでやったことあるんですけども、開いた文庫本の文字を消していくっていう。その物語とか、楽譜だったら音楽とかの一部を消すことで、何かバラバラになるというか

加須屋 音楽が、繋がったメロディーが、バラけてますね。

森末 そうですね。文字とかもそうですし。

加須屋 文字を続けて物語が消えて、一部残ってるので、読みながら繋げてみて、この前もなんかね、目が悪くなってる、目をこすって見直したりとかしちやいますよね。

森末 さっき仰ってた、物の境界とかの話なんですけども、私はよく日用品とかを使うんですけども、その物の形、コップだったらこういう形だと思うんですけども、この境界を変えるというか、自分で変えてるわけじゃないんですけど、見方を変えるというか。存在自体は変わらないけれども・・・例えば、これは削った本なんですけれども、百科事典ですね。その、本来の、四角い本の形ではなくなるという。さっき出たボディブラシとかも、毛が伸びることで、境界の形を変えていくとかいう思いがあります。

加須屋 そこでその、ボディブラシはもうボディブラシとしては使えない、本も本としてはなかなか、一部削られて、というか開いて読むのではなくて、こういう山に見立てた形のおもしろさとか、一応本であることは分かるけれども本じゃないのか本なのかっていう。

森末 実用的ではなくしたいというのがありますね。

加須屋 この、今回の和室の真ん中に山を持ってきた、床の間に楽譜のバラけていく音っていうのが、なにかその空間を作ることへの考えとかはあるんですか？

森末 そうですね、和室を見たときに全体にこの作品（百科事典の作品）を置きたいなと思ったんですけど、それは何か・・・何なんでしょうね。以前はそういうホワイトキューブには置いて展示したことがあるんですけど、和室とかの身近な場所で置いてみたいなと思ったんで。（画像を見ながら）これは奈良の学園前というところで。

加須屋 やはりその、ホワイトキューブではない場所での展示を経験されて。

森末 そうですね。・・・（画像を見ながら）これも和室なんですけど。

加須屋 なんか不思議な和室ですね。

森末 さっきやってたようなレース編み、金魚鉢とか湯飲みとかコップが繋がってるんですけど。あと奥に見えるのが、また本を削ったものと

加須屋 掛け軸のはずが。

森末 あれは文字になってるんですけど、この本の中から選んだ言葉を針金で模って吊るしてます。

加須屋 今回もね、針金の文字が何箇所かありましたが、これでも。この本は文庫本？

森末 じゃないんですけど、全集のやつです、あの小説の。

加須屋 小説は愛読してたもの？

森末 文豪の。文豪の全集です。なるべく愛読書とかじゃなくて。

加須屋 そういう個人的な意味は付けないように・・・そこもクールなんですね。その、形を見るんだけど、見るひとはどうしてもこうやって私が言ったように「何の本だろう？」とか、これも「森末さんとどういう関係があるんだろう？」とかつい考えてしまって。でも分からない。その、見る人が置かれた、どっちとも規定できない不思議な

議論な宙吊りの間にある感じが、

森末 文字も最初作ったときは読まれなくていいと思って作ってたんですけど。

加須屋 ちょっと読みにくいんですね。

森末 そうですね。でもあまりにも見てくれた人が読んでくれようとするので、

加須屋 そうですか、読みたくなりますよね。文字だなーと思うとやっぱり何て書いてあるのかなーと。

森末 だから、それならばもうちょっと文字に意味を持たすことに。意味のある言葉を使っているわけではないんですけど、読んで「ん？」って思うような言葉を最近は選んでやってたっていうのはあります。（画像を見ながら）「とふいに、」と「いいやちっとも」なんですけど、まあ全然この角度からはちゃんと読めないです。交換可能な文字を選ぼうとしてます。

加須屋 和室でいかにもありそうな風景というか、ありそうな物ですね、お茶碗だったり。ただ、ありえない物としてある。

森末 （画像を見ながら）これはまた別の、学園前の。洋室ですね。ダイニングテーブルの上に既製品のテーブルクロスがかかっているんですけど、その上にグラスを置いて、見にくいんですけど、糸が面のように水平面に当てて、そこに下の刺繍と

加須屋 既製品の模様をなぞるという、

森末 なぞるというか、そうですね、トレースしたような、模様が浮いたような感じにしたい。これはレースカーテン、なんて説明したらいいの、下のテーブルのアップがこれなんですけど、これは

加須屋 レースのカーテンは、じゃあ既製品？

森末 既製品ですね。それに、テーブルの面に立てた羽毛を、レースの穴から飛び出すようにして、テーブルのようにしているという。

加須屋 わざわざ面を通過させて。（画像を見なが

ら）全てじゃなくて少し残すことでより不思議な、これこういうのは残ってなかったら上に置いてはるのかなって思っちゃうんですけども、これだったら明らかに下からレースは見えるし、どっちが下かはよく分からなくなっていますね。

森末 私毛を出せば出すほどテーブルの面が上に来てるように浮かび上がってくるんですけど、模様を残しているのでまだレースとしてもまだしっかり残っています。

加須屋 本当は台の上のレースカーテンがかかっている状態なんですけど、そこから下の台は台にくっついた羽毛が飛び出していきような。（画像を見ながら）和室に戻ります。これがさっきの床の間の。手前の部屋のザル。

森末 これは紐暖簾なんですけど、既製品の紐暖簾の紐をザルに通しただけ（笑）

加須屋 素麺みたいにも見えます。

森末 私もしながらラーメン、と思いながらやってみました。

加須屋 まさかざるがこんなふうに使われるとは、お店の人も思いつかなかったでしょうね。

森末 まさか、まさかの。喜んでなさそう。

加須屋 このサイズ、とかこのタイプ、とか探されるんですか？

森末 そうですね。穴はこのくらいで、

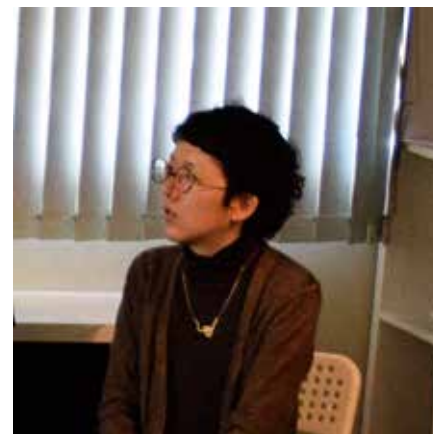
加須屋 そっか、やっぱり穴のサイズによって違います？

森末 そうですね、糸の太さにもよるんですけど、通らなかつたりとかするので。

加須屋 でもその既製品とおっしゃいますけどあまり癖がない既製品ですよ。特徴としてはいろいろイメージが元々あるものじゃないんですよ。

森末 デザイン的なものは選ばないようにして、定番といわれているような、百科事典もなんかもう動かへんような。

加須屋 定番。



森末 由美子さん

森末 で、ちょっと古くなってしまうものが多いんですけど、だから今のものを使うと後々危ないんじゃないかと思って

加須屋 少し時間をかけていって、普及していった、わりとみんなが分かるというか、元のものが何かは分かると。共通してそのものとしてはありふれた日用品が、でも違うものと組み合わせさせて。さっきも聞いたかもしれませんが、なぜこうしようと、どこから思いつかれるのでしょうか。

森末 物を見て思いつくのでなくて、さっき言ってたような網目のものに何かを通していかうものが、構造上の考えとかが先にあって。

加須屋 ます構造上から考える？網目状のものに何かを通していったいうちょっと抽象的なこと

森末 そうというのが結構動機になってるんです、自分の中で。

加須屋 物を見てて思いつくんじゃなくて、ふとした、製作中、

森末 いろいろな場合があって。説明が難しいんですけど、ひとつの作品の中にいろいろな大事な要素が混じっていて。ものの構造とか、文字に関してとか。そういうやりたいことの条件に合うもの、相応しいものを選ぶとこうなったという感じです

ね。

加須屋 網目のものに通したいっていうのがある、でも網目のものもいっぱいあるし、通すものもいろいろある中から選ばれるわけですね。

森末 はい。まず何かその組み合わせが不自然じゃないものの組み合わせの例えばレース編みとグラスとかだったら、まあ自然かなっていうのもあるんですけど。これは、あんま自然じゃないですよ、ざると暖簾。

加須屋 ああ、ざると暖簾。でもざるでね水切りするじゃないですか、麺を茹でて。そういうのはあるかなって（笑）

森末 それからは来てないんですけど（笑）

加須屋 じゃあどっちかというたまあざるとかの仕事も、さっき見せていただいた刺繍とかの仕事の延長線上に？

森末 そうですね、その延長とも言えるし発展形とも言えるっていう部分もありますけど。

加須屋 暖簾が使われた作品は他にもありますか？

森末 暖簾はないですね、さっきのカーテンとかのはあるんですけど。

加須屋 カーテンが建具というか長くぶら下がるものとしての。

森末 面。でも紐暖簾なんで、糸、線としての意味もあるんですけど。でも面ですよ、中途半端な

加須屋 ざるに糸を渡した作品それとちょっと関係はありますね。

森末 それも関係ありますね。

加須屋 これってじゃあ制作は割と新しい？

森末 これは2016年から今回作ったやつです。

加須屋 今回展示のために作った

森末 そうですね。

加須屋 会場を見て、和室をご覧になって、じゃあここにはこういうふうに、というふうな。

森末 あ、そうですね。

加須屋 奥の花瓶の文字となんか関係は、ないか。

森末 ないです。

加須屋 文字を模った一筆書きの作品で「さっきの」とかあるじゃないですか。「きいて」も、あまり意味は関係ない

森末 関係、一応、隣の部屋で文字の作品を使ってるので、っていう感じですかね。しいて言うなら。

加須屋 百科事典を山のように並べた作品ですね。きく、って音楽の聴くとは関係ないんですか？

森末 ちょっと思ったんですけど、そんなに関連性持たせないようにはしてます。

加須屋 そうですね、意味を付けようとするごとにそれがはぐらかされてしまう感じもありますね。

森末 でもいつもその、針金で文字をかたどった作ってるんですけど、だいたい出典元があって、自分で作った言葉は使ったことないですね。小説とかから抜き出した文節とか。

加須屋 そういうこともさっきの、版的な、一から独自にっていうんじゃない、一応何かあるもの既製品であったり、元のある文章だったりをトレースしていくとか、それを型にして作っていくところ、一貫してるなあと。

森末 あとやっぱり抜き出したときに、あんまり漢字とか入ってたらすごく意味が強くなってしまいうんですけど、だからこういう「きいて」とか「さっきの」とか他の小説にも使われているっていう言葉を使うようにしてます。

加須屋 元はあるんだけどそれが限定されないというか。

森末 どこにでもいけるような、交換可能な。

加須屋 それには、日常的にどこにいても身近な、ある程度の同時代性とか同じ文化を共有しているものとしての共感みたいな、共感をベースに驚きが、っていうことかなと思って。さっきオランダで、海外で日本じゃない場所でお見せになっ

たこともありますよね。その時の反応がまた違うのかなと思うりするんですけど。彼らにとって身近かどうかの違いと、反応も違うかもしれない。どうでした、オランダで見せはったとき。

森末 そうですね、ヘチマのたわしなんですけど、それに糸をちょっと、アップの画像がないんですけど、糸掛けていって

加須屋 どうやって作ったんですか？

森末 ヘチマたわしの表面に刺繍糸を何色も使って編み込んで、なんていうんですかね、引っ掛けていくんですけど、

加須屋 それが2013年か。日本現代美術展みたいなやつ。

森末 ああ、そんな感じですね、そうですね。これを海外に出品したときに、ヘチマたわし自体があんまり認知されていなかったみたいで、

加須屋 向こうにヘチマってないんですか？

森末 一応調べて、あるのはあるっていう話だったんですけど、

加須屋 それをたわしとして知られてない、スポンジっていうか、

森末 日本人ほど知られてなかったという。だからそういう日用品を選ぶときにベースとなる知識とかがやっぱり必要だっていうふうに思いました。

加須屋 これについて質問が多かった？

森末 ヘチマたわしの作り方についての質問が来て、作品じゃなくて。

加須屋 ヘチマたわしってヘチマを繊維だけにするんでしたっけ。

森末 そうですね。

加須屋 普通はそれを、たわしとして使うんですけど、森末さんヘチマたわしは売ってるもの？ 自分で作ったんですか？

森末 作ってなくて、それは既製品です。

加須屋 そこに刺繍糸で、ヘチマの元の

森末 表面を再現していく

加須屋 ごつごつしたやつをずっとなぞっていく

森末 そうですね

加須屋 パッと見ヘチマが置いてあるかなあと思うけど、よく見ると刺繍してあるっていう。さっきも、枯葉、葉っぱとかも同じなんですね

森末 葉脈を残して

加須屋 これは葉脈になった既製品を使うんですね。

森末 葉脈、スケスケの葉脈って実験とかでも作れますよね。最初自分で作ってみたんですけど、やっぱりなんか違うなあとと思って、既製品を使っています。それを糸で縫う、刺繍していって、葉っぱの模様や肉厚をつけていくっていう。

加須屋 紅葉してたり、ちょっと虫食いがあったり。

森末 これもさっき言ってたザルとか網とかの感じで、葉っぱの面になれてないスケスケの葉脈を自分がこう糸を掛けていくことで面にしていくとか、そういうようなことも考えています。

加須屋 葉っぱはだからその万国に共通しているんで分かりやすい。

森末 そうですね、そのほうがまだヘチマよりは。

加須屋 ヘチマ自体の説明がいりますもんね。でも作り方を今聞いても、その細かさというか作業の時間をかけて作る感覚っていうのはすごく日本的なものかな、と受け取られるんじゃないかなと思います。

森末 そうですね、やっぱり細かさっていうのは結構パッと入ってくるものなので、でもそれがメインかと言われると私としてはそうでもない、そういうところはちょっと気をつけていかないととは思ってます。

加須屋 その細かさ、細かい作業を実際されているわけですけど、そこではなくて、面になりきれない境界に抜けさせるというか、境界を突き

抜けるとか、繋げるとか。

森末 そうですね、選んでいるモチーフとか、そのやりたいことっていうのが結構ひとつひとつの集積で大きくなっていくとか。糸を紡いで面にしていくとか、そういうような印象のものが多いので、結果的に手がすごく込んでるっていう（笑）

加須屋 そういうふうに見えます（笑）そういう作品は本当に多いです。砂絵の作品にしても本当に細かい作業を積み重ね・・・本人としてはそこじゃない？

森末 そこを見てもらってもいいけども、そうじゃないところもあるんですよっていう。

加須屋 そうじゃないところも、それだけじゃない。確かにだからすごくシリアスな技術の素晴らしさみたいなのを見たいけど、そこではぐらかされたユーモラスな、ギャップでおもしろいのかなと思って、おもしろいっていう言い方はあれなんですけど、ユーモアがあるっていうところも含めた魅力なんですね。どっちを見たらいいのとか、どっちもなんですけど、どちらにも交互に印象が入れ替わる感じがして。

森末 いいことかどうかわからないんですけど、作品を作るときにいろんな要素が入っているの、



加須屋 明子さん

それを全部とは言わないんですけど、いろんな見方をしてくれたら嬉しいなと思います。

加須屋 作られるときもひとつのコンセプトではなくて、いろんな要素からの。最近のマイブームは毛を引っ張り出すことと仰ってました

森末 そうですね、さっきやってたようなレースカーテンの穴から、そういう作品を今作ったりしてます。

加須屋 それはやっぱりどっちが上でどっちが下に分からなくなるみたいな

森末 前後関係がハッキリしなくなってくところがおもしろいなと思って

加須屋 やりすぎても逆転しちゃうから、逆転するのではなくて途中で止める

森末 はい。

ハッキリしないを長く

加須屋 今回日常の中のドラマっていう展覧会の中で選ばれておられて、タイトル見たときになるほどな一と思ったんですけど、ご自分ではどういうふう

森末 単純に日常的なものを使っているということもあるし、いろんな作品を通して思っていることのひとつの中に、ものを見たときに、どうなってるのかなみたいな勘違いとか、見間違いとか、ハッキリしない状態、分かんけどこうなってるかなっていうような状態を長く保持したいっていう思いがあって。そういう意味では日常の中のドラマ、ドラマとまではいかないけどちょっと違う日常過ぎない、ちょっと違う部分。

加須屋 ちょっと違う。すごく違うとか、ドラマチックな「おお！」っていう驚きじゃなくて、やの違和感が長く続く。

森末 頭の中で一瞬に処理されてしまうことだと思うんですけど、それはやっぱり人間の賢さからきてると思うんですけど、それを取っ払ってもの

を見たいというか

加須屋 見慣れたものとか、これはこういうふうにするものとかっていうようなことは経験をもっ

森末 経験とかそういう頭を通していくこともそうですし、頭を通さないで反射的に分かっってしまうようなことってあると思うんですけど。

加須屋 例えば何？

森末 藪の中を歩いててガサッと音がしたらビクッとして身構える、みたいな。ちょっと違うかもしれないんですけど。危険を察知する本能的な部分とか、なんかそういうのがあるらしいんですよ。

加須屋 アフォーダンスというのかな。

森末 脳を通す前に体が反射的に動くような、そういうものはたぶん、人間が賢い故に持ってると思うんですけど、

加須屋 じゃあそれを自分の意思で外そうと思っても難しい

森末 そうですね。でもそれをなくすと、なんかもっとものが違う見方ができるんじゃないかって思っています。

加須屋 それでいろんなあの手この手でそこを外せたらいいんじゃないかと。みなさんは外されたんでしょうかね。ご覧になった方からの感想とかも聞いてみたらどうでしょうか。

（会場からの質問）

観客 1 加須屋さんにひとつと、森末さんにひとつずつ質問なんですけど、加須屋さんと森末さんは大学では先生と生徒の関係だったんでしょうか。

加須屋 私が2008年から京芸に來させていただいたので、重なってはいるんですけど、でも

森末 2、3日ぐらいの授業をされてたんです

加須屋 集中講義をさせていただいたので、2008年は特に前期は私も展覧会を抱えて担当展

持ちながらだったので。

森末 その時に参加だけして結局提出物とかも出さずに（笑）単位取ってないんですけど、すみません。

加須屋 ギャラリーにみんなで行ってみよう！とか、大山崎に行ったり。

森末 あ、そうですね。あんまりそんなに

加須屋 そうですね、私は芸術学で、授業取っていただいたらもしかしたら重なるかもしれないけれども、修了審査も別に聞かなかったよね。その年の作品展で、こんな作品を作る方がいらっしゃるんだと驚きの目を持って見たみたいな感じです。

観客 1 感覚的にはキュレーターとアーティストの関係ってあるので

加須屋 そうですね、その後いろいろ見せていただいて、ギャラリー・@KCUAの「転置」っていう展覧会をするときに声をかけた、そうした関係の延長で今日この場に呼んでいただいたのかなと思っています

観客 1 師弟関係なのかなと

加須屋 先生は、たぶん木村秀樹先生？

森末 版画専攻だったので、実技の先生はそちらで。

加須屋 考え方とかもすごいきつと影響を受けたのかなと、まあ影響まで言わなくてもたまに似ているところがあるんじゃないかなと思います。

観客 1 ありがとうございます。森末さんに質問は、作品を作るときに「こういうものが作りたい」網状のイメージがあるからこう突き抜けさせたいというのがあったとして、作業工程というのがありますよね。で、制作・完成があると思うんですけども、やるんじゃないかっていうのは、二度とやりたくないみたいな、イメージと作業がすごく乖離してたような大変なものってございましたか？

森末 そうですね、レース編みの作品は時間がか

かりすぎて、最初の思いがちょっと薄れてきてしまつて（笑）

加須屋 突き抜けるところがね、少ないから。

森末 一瞬で終わるから。ほかのところも時間がかかりすぎて、とか、そういうのもありますけどね。

観客1 テーブル全部覆われた奈良での展示の作品なんかを見ると本当に周りの部分がすごく大変そうだなっていうのと、割れ物なので、気を使うこともすごく大変そうだなと思ったんですけども。

森末 そうですね。でもできるとしたら苦ではないんですけど、これはちょっとできないかもしれないっていうやつは、物理的にちょっと私の技術では無理かなっていうやつは、早々に諦めたりとかもしてるんですけど。

観客1 未完成がある

森末 そうですね。

観客2 作品の前に、お二人に。現在の仕事なんですけど、どういうことをされているんですか？

森末 私は作品とはあんま関係なくパソコン使ったりする仕事を。

観客2 仕事しながらも作品作ってる感じで

森末 はい、そうですね。

観客2 加須屋さんは学校の先生、大学の

加須屋 私は京芸で美学・芸術学を教えています。総合芸術学科でゼミを持ったり全体向けに授業を持ったりさせていただいてるのと、出身が兵庫県たつの市で、そこで2011年から龍野アートプロジェクトっていうのが始まりまして、規模はそんなに大きくないんですけど、城下町を利用した展示っていうのを毎年秋に実施していて、そちらにも関わっています。

観客2 作品は作らないんですか？

加須屋 私は全然、理論のほうなので見てそれについてテキストを書いたりする、キュレーションの側です。

観客2 森末さん、作品がね、題名のない作品があつて。

森末 題名はだいたいそのままで、これやったら「葉」とかそういう

観客2 実際には作品には書いてないわけやね、これ「葉」ですか

森末 一応タイトルはあるんですけど、

観客2 タイトルは一応ある

森末 でも「ざる」とか「テーブルクロス」とかそういう感じですね。

観客2 見た感じがやっぱりね、日常的な物なんやけど、無機質な感じがする。その辺はすごく狙ってるかそうではないか

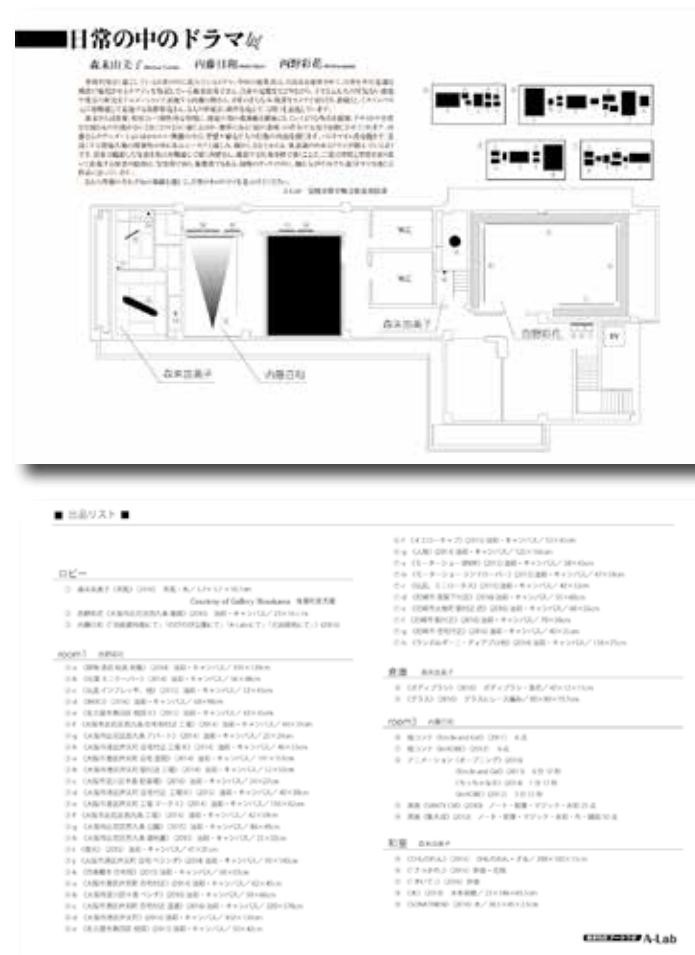
森末 手作業なんですけど、あんまり手跡を残さないようにしたくて、だから嬉しいです、その感想は。

観客3 刺繍の作品っていうのが、いくつか見せていただきましたけれども、ザルとか茶漉しとかね、だいたい丸い感じがするものが多いですよね。それで質問と思ったのは、昔っていうか今もそうかな、刺繍をするときの粹みたいなのってね、丸いんですよ、布をピンと張って使うと思うんですけども、美術作品に糸を使ったりとか、使って作品を作ろうと思うよりも前に、何か刺繍というものをやっておられたりとかされたことっていうのはあるんですか。

森末 手芸とかは嫌いではないんですけど、レース編みとかだったら今回初めてというか作品を制作するにあたって本とかで習得したもので、刺繍はそんなに、刺繍もそうですね、初めてという感じですね。

観客3 じゃ作品を作るためにそういう技法という手法を身につけられたという感じですか。

森末 はい。



会場配布資料

あまふアートラボ A-Lab archive vol.7
Exhibition vol.6「日常の中のドラマ展」

発行

編集

制作

尼崎市 都市魅力創造発信課